



座主跡

第4章 史跡の価値

史跡宝満山の歴史的価値	100
史跡宝満山の景観的、自然的価値	100

第4章 史跡の価値

宝満山の史跡指定の価値は、我が国の山岳信仰のあり方を考える上で重要な、古代から近世に至る信仰に係る遺構群の存在と、山岳信仰が古代から現在まで継続している信仰の山としての価値や信仰の山として管理された結果残された、自然環境や山容、里山等の価値がある。

史跡宝満山の歴史的価値

【山岳信仰の山としての価値】

史跡宝満山では祭祀行為が山頂等で始まって以後、西海道を管轄した古代の役所「大宰府」と密接な関係をもって成立した信仰の山である。宝満山は文献資料からは僧が入唐する際や帰朝後の参拝の対象となっていたことがわかり、中世には修験道の活動が確認できる。戦国時代には坊中が山中に移動し、近世を通じて山岳信仰の山として発展した。

また、竈門神社は古代以来の山岳信仰を継承しており、修験道においても宝満山修験会により峰入りや護摩供などの催事が現在も毎年催行され、信仰の山としての性格は現在にも生きている。

山中には遺物の散布地、祭祀跡や堂舎跡、窟、井、登拝道、西院谷・東院谷の坊跡などの信仰関連の遺構がその姿を良く残しており、古代から近世まで継続する山岳信仰の姿を遺跡の変遷でとらえることができる。

史跡宝満山の景観的、自然的価値

【山岳及び里山としての価値】

古来、宝満山は笠を置いたような姿から「御笠山」、山中より雲霧が立ち上る姿から「竈門山」等と、その山容に基づいた名前で人々に呼ばれてきた。宝満山の筑紫野市側に流れる蘆城川(宝満川)周辺は蘆城野とよばれ、万葉集に歌われた風光明媚な場所であるがその風景の核は御笠山(宝満山)と考えられる。山に降った雨は周囲を潤し、近郊を潤すだけでなく玄界灘や有明海に達する広域な水源地となっている。

山中は、歴史的に信仰に根差した法や禁忌により管理されてきた結果、人の手を加えていない自然林である山頂部と、修験道の行者が居住した坊跡を中心として山伏が管理していた中腹、薪炭林・里山として周辺住民が長年利用してきた山裾など、山中でも多様な林相が認められる。山裾では竈門神社の社叢林の緑や四季折々の木々による山の変化がみられる。

この山岳信仰により歴史的に醸成された環境は多くの登山者を惹きつけており、遠く離れて美しい山容を眺めるだけでなく、自身が山に入ることにより、直接的に自然に溢れる多様な林相を体験できるなど、景観的、自然的価値が高い。